

琥珀ができるまで

琥珀のもとになったのは、古代の樹木から出た樹脂。樹木にも、樹脂を出すものと、出さないものがあります。身近な樹木では、マツの木は幹が傷つくとマツヤニと呼ばれる樹脂を出して傷をふさぎます。琥珀の起源となった樹木は、マツやスギなどの仲間の針葉樹が中心ですが、マメ科やフタバガキ科の広葉樹もみられます。

地中に堆積した樹脂からは、長い年月をかけて揮発性のある成分が抜けていきます。こうして揮発成分を含まない、安定した状態になったものが琥珀で、「樹脂の化石」ともいわれます。琥珀によく似たものに、揮発成分が抜けきっていない「コーパル」と呼ばれる樹脂があります。

久慈の琥珀の起源は約9千万年前の白亜紀。樹木はナンヨウスギの一種の針葉樹と推定されています。起源となる年代は産地によって異なり、最も古いイギリス南部ヘイスティングスは約1億4千万年前、世界最大の鉱脈があるバルト海沿岸は約4千万年前とされています。

白亜紀といえば恐竜の時代。近年、久慈市では琥珀と一緒にワニやカメ、翼竜、肉食恐竜、草食恐竜など貴重な化石の発見が続いています。毎年2回の発掘調査が続けられており、新たな発見に期待がかかります！



まれに、小さな動植物を内包した琥珀が発見されることがあります。これらは、まだ樹脂が固まる前に中に閉じ込められてしまったものです。



数センチを超える大きな生き物は、ネバネバした樹脂から脱出することができるので、琥珀にとらえられている生き物のほとんどは、数ミリの小さな虫などです。しかし、中には体長5センチほどのトカゲやカエルなどが入ったものも発見されているようです。これらの内包された動植物は、古代の森の環境・生態がどのようなものだったのかを知るうえで、貴重な資料となっています。

虫入り琥珀は、久慈地域の地層からも発見されています。白亜紀から現在までほとんど姿を変えていないホソハネコバチの仲間が発見され、クジムカシホソハネコバチと名付けられ発表されたことも。



琥珀の呼び名

古代から人々に利用されてきた琥珀は、さまざまな国でつけられた呼び名を持っています。

日本で使われている「琥珀」という名前は、元は中国語。中国では虎は百獣の王であり「虎が死ぬと、その魂魄(たましい)が地中に入って“虎魄=琥珀”になる」という逸話があるようです。

久慈地域では「薰陸(くろく)」「薰陸香(くんのこ)」などと呼ばれました。ただし、一般的に「薰陸」「薰陸香」といった場合、香や漢方薬の樹脂質原料の総称で、必ずしも琥珀を指す訳ではないので注意が必要です。

古代ギリシャでは、牡牛座の星のひとつ、エレクトロ星から名前を取り「エレクトロン」と呼ばれました。琥珀には、摩擦によって静電気を発する性質があり、布などで擦るとチリや埃など軽いものを引き寄せることができます。この性質から派生して、英語で電気を表す「エレクトリシティ[electricity]」という言葉が誕生しました。

また、この静電気で物を引き付ける性質から、トルコでは「ケフリバル(ワラを略奪する者)」という名前で呼ばれています。

現在、琥珀は陸上で採掘されていますが、バルト海沿岸では海の中にも琥珀を含む地層があり、暴風雨の後などには浜辺に大量の琥珀が打ち上げられます。かつては、これを採取するのが一般的であり、フィンランドでは、海で採れることから「メリピキ(海の石)」と呼ばれています。

ロシア語では「ヤンターリ」、リトアニア語では「ギンタラス」といい、病気を防ぐという意味をもつそうです。ドイツ語では燃える石を意味する「ベルンシュタイン」と呼ばれます。

英語の「アンバー[amber]」の語源はアラビア語で海に漂うものを意味する「アンパール」です。元々はマツコウクジラから採れる香料「龍涎香」を指す言葉だったようですが、同じく樹脂質で香の原料になり海で採取される琥珀と混同され、最終的に琥珀を意味することになったともいわれます。なお、龍涎香は英語で「アンバーgris[ambergris]」といいます。

久慈市民文化会館アンバーホール、特別養護老人ホームぎんたらす久慈、レストランくんのこなど、久慈には琥珀にちなんだ名前の施設がたくさんあるんだ！



琥珀の歴史

琥珀は、その色合いや光沢から「太陽の石」とも呼ばれ、古くから装飾品や魔除け、お香、薬などとして使われてきました。その歴史は非常に古く、ヨーロッパでは旧石器時代(1万年以上前)の遺跡から琥珀の装飾品が出土しており、新石器時代(約6千年前)には交易品として流通されていたとみられています。このように、太古の遺跡から出土することから、人類最古の宝石ともいわれます。



日本国内でも、5世紀ごろの畿内や出雲の古墳から琥珀製の玉が出土し、調査によって久慈産琥珀であることが確認されています。このことから、当時のヤマト朝廷と久慈の間に交易ルートがあったと考えられています。

市内の遺跡からも琥珀製品は多数発掘されており、古いものでは、縄文時代前期の大尻遺跡(約5千年前)から琥珀原石が出土しています。また、昭和59年の国道45号線バイパス工事で発掘された中長内遺跡(奈良~平安時代)からは、多くの竪穴式住居の跡とともに未完成な琥珀製玉や原石が多数出土しました。このことから、中長内遺跡は古代の琥珀工房であったのではないかと推定されています。



江戸時代には、お香の原料などとして珍重され、1614年には、南部利直から徳川秀忠への献上品として贈られた記録が残っています。また、他領輸出御法度とされ、許可なく他藩に持ち出すことはできなかったようです。久慈地域では、琥珀を砕いて燻し、牛や馬から蛇や蚊を追い払うカヤリ(蚊取り線香)として利用されていました。

昭和に入ると理研琥珀工業などの企業が採掘に参入。絶縁体や塗料原料など軍需物資として、太平洋戦争中の最盛期には市内全域で数百人が従事し、採掘量は1日1トンに及ぶこともあったといわれています。戦後も小規模な採掘が続けられましたが、昭和30年ごろまでに多くが閉山したようです。

中長内遺跡出土琥珀製玉類未成品として市の文化財に指定されていて、一部が歴史民俗資料室に展示されています。



琥珀ってなに？

「琥珀」といえば、誰もが(?)知っている久慈の特産品でも「オレンジ色の宝石」という以上に、詳しく知ってる人は、あまりいないのでは？意外と知らない琥珀のこと、久慈と琥珀にまつわるアレコレを紹介します。

ジモト学の のススメ



さらに知りたい人は！

久慈市歴史民俗資料室

■小久慈町 37-32-1
■文化課 郷土文化係
TEL 52-2700



市内の遺跡から発掘された琥珀製品などを展示しています。
(見学無料・要予約)

久慈琥珀博物館

■小久慈町 19-156-133
国内唯一の琥珀専門博物館。さまざまな視点から琥珀について学ぶことができます。
開館時間…9時~17時
入館料…高校生以上500円
小中学生200円



■参考文献

▶スレプロドリスキー『こはく その魅力の秘密』▶田村栄一郎『琥珀誌』▶アンドリュー・ロス『琥珀 永遠のタイムカプセル』▶くんのこほっば愛好会『くんのこほっば昔語り』